

赤ちゃんのきこえと新生児聴覚検査について（ご案内）

妊娠の経過は順調でしょうか。赤ちゃんの誕生が待ち遠しいですね。

おなかの赤ちゃんは、お母さんの呼びかける声やまわりの音にどんな反応を示していますか。

赤ちゃんが生まれると、からだの状態は担当の医師が診察いたしますが、徐々に発達していく赤ちゃんの「きこえ」について、今から、お父さんお母さんに関心をもっていただきたいと思います、大切な点をお知らせします。

多くの方にとって、「きこえる」ということは当たり前で、「きこえ」についての知識や情報は少ないと思われます。

お父さんお母さん自身は、きこえはいかがですか？ 難聴はおありですか？

ご自身が難聴や「ろう」である場合、お子さんのきこえの程度に気づきにくいですから、早いうちに調べてみると、ご家庭内での子育てにも役立つことでしょう。

では、「きこえ」とは「音をきく」以外にどんな役割を持ち、どのように発達するのでしょうか。

【きこえと話し言葉との関係／きこえの発達について】

「きこえ」は話し言葉（音声言語）の習得と深い関係があります。言葉がきこえるから話し言葉が育ちます。

（一方で、手話言語があり、言葉が見えるから手話言語が育ちます。）

「きこえ」はからだの発達と同じように段階的な発達があります。

からだの発達には、首がすわる → 寝返り → ハイハイ → つかまり立ち
→ つたい歩き → 一人歩き

という段階が一般に知られており、また目に見える発達であるため「生まれてすぐ歩かない」といって心配する人はいませんね。

「きこえ」も同じで、生まれてすぐには大人と同じようにはきこえていません。生まれた時は大きな音にしか反応しません。

○ 周りの音に関心を持ち始めるのは 生後 4 か月頃から

○ 話し声程度の音に振り向くのは 生後 6 か月頃から

○ より小さな音に振り向くようになるのは 生後 10 か月頃から
と段階があります。

赤ちゃんが生まれたら、どうぞ「きこえ」の発達にも関心をもってみてください。

秋田県では、生まれてまもない赤ちゃんの「きこえ」の検査を、いくつかの医療機関で行っています。

【赤ちゃんの「きこえ」の検査の役割】

きこえの障害は、はた目には「みえない」ために気づかれにくいという特徴があります。また「ことばがききとりにくい程度の難聴」があると、話し言葉の発達が遅れてしまい、ある時期が過ぎてしまうと発達するのが難しくなると言われています。

このようなことをできるだけ避けるため、もし生まれてからなるべく早い時期に難聴の有無がわかり、生後4～5か月頃から専門の機関で適切な指導を受けることができれば、話し言葉の発達において、大きな可能性が広がることになります。

このことは、医療の現場では以前から十分知られていましたが、難聴の程度が外から「みえない」ために、実際には診断が遅くなり、話し言葉の習得に最も大事な時期を逃してしまう例が少なくなかったのです。

近年、生まれて間もない時期に、きこえの程度を推測することができる検査方法が開発され、国内でも普及しつつあります。

この検査は、器械を使ってささやき声程度の音を赤ちゃんにきかせ、その反応をみるもので、1,000人検査を受けると、3～8人程度のお子さんを判定する精度をもっておりますが、そのうち、実際に聴覚の障害をもつお子さんは、1～2人程度と言われております。

この検査の結果、詳しい検査を必要とするお子さんについては、からだの成長をみながら時間をかけて正確に診断します。中には、検査当日、きこえに関する働きが未熟で、正確な判定が難しいお子さんも含まれる可能性があります。この検査によって、「早く見つかってよかった」と保護者の方には思ってもらえるよう、最善の体制で検査を行っています。

また、詳しい検査を必要とする場合でも、子どもの耳鼻咽喉科専門医が、お子さんを診ていく準備を整えておりますので、どうぞご安心ください。

この検査については、赤ちゃんのお誕生後に詳しくご案内しておりますが、ご不明な点などありましたら、産婦人科の担当医や看護師へお気軽にお尋ねください。